

保育実践における「記録」の機能－育ちの資源の生成過程についての発達心理学的研究－

藤野 友紀 [北海道大学大学院教育学研究科附属乳幼児発達臨床センター／助手]

背景・目的

保育実践における「記録」は、保育者が実践を「反省 (reflection)」する道具となっており、未来の子どもの発達の資源を創り出す。「記録」の機能についての検討は、保育者の働きかけと子どもの発達の力動的関係の理解に迫ることにつながる。これは個体中心的な見方を超えた発達観の構築の試みである。本研究では、動的で関係的な「記録システム (recording system)」を分析対象とし、保育時間中の保育活動、カンファレンス、記録物の生成と利用を長期に参与観察して、これらの相互関係と「記録システム」の機能を検討し、保育実践という活動を再考することをめざした。

内容・方法

本研究は、(1)観察の記録法についての組織的実験、(2)保育実践現場でのフィールドリサーチから構成される。(1)は、記録行為自体を研究対象にする際の分析単位を探るために実施され、記憶行為の資源は何か、記録行為の資源が記録方法の何によってどのように規定されるのかが検討された。まずそれぞれ記録方法が異なる5パートに分かれた観察者10名に50分間の保育実践場面を記録させ、その後に行われた記録された事象についてのディスカッション場面も記録した。(2)では、調査者が実践に非常に近い立場で関わっている保育施設において、自らが実践の関与者かつ観察者となる実験的エスノグラフィを行った。保育実践やミーティング、AV機器を用いたカンファレンスに日常的に参加してフィールドノーツを作成し、「記録」をめぐる実践者の行為と関係のあり方および談話の特徴を記述した。また、長期にわたる実践的関与と参与観察をもとに、実践の変革過程を「記録システム」の変化過程として検討した。

結果・成果

(1)観察の記録法についての組織的実験:各記録法パートの記録とディスカッション場面の記録を、VTRのフレーム変化の過程、各記録法の記述形態、各記録法の記録対象とエピソードend markの有無、記録者によって語られた各記録法の特徴といった観点から分析した。「直接観察の逐語記録」「直接観察の意味記録」「VTRの逐語記録」「VTRの意味記録」の比較から、動作の記述は記述者の意味生成と切り離しては存在しないことや、再視聴可能なVTRが〈見る〉から〈書く〉に至る時間を拡張して意味の把握を助けていることが示された。また、AV操作者の録画行為も、単なるAV機器操作なのではなく、一つの意味生成のプロセスであることが明らかにされた。これらの結果から、「視野」と「時間」と

“他者との協同”が絡み合っており意味生成の資源を創造かつ制約していることが示唆された。つまり、記録行為とは、見た産物の貯蔵を指すのではなく、むしろ記録行為が見ることを方向づけ制約するのだといえる。

(2)保育実践現場でのフィールドリサーチ:第一に、3か月にわたって週1回のペースで行われたビデオカンファレンスにおける意味づけの生成および展開の過程を分析した。「ビデオ記録ノーツ」「園保存用記録ファイル」「フィールドノーツ」を分析対象とし、カンファレンスにおける談話の特徴をまとめた。そこでは「ビデオ場面自体を相対化する発話」と「ビデオ撮影者のストーリーを巡る発話」が見られ、さらに後者は「ストーリーに沿うエピソードを追加する発話」「ストーリーを長期的時間のなかに位置づける発話」「ストーリーに沿ってエピソードを読み替える発話」「ストーリーを他のエピソードで相対化する発話」から構成されていた。このように、ビデオを媒介とした保育者による談話には、複数の視点と記憶の重ね合わせによる新しい意味づけの促進が見られた。さらに、保育者は上記のような談話を通して、ある一つのストーリーが確定されることを結果的に協同で回避していた。つまり、ビデオカンファレンスは、一つのストーリーをあえて提示することにより、その確定を回避するような活動を保育者に引き起こしていた。ビデオカンファレンスにおけるこのような「確定回避」は、子どもは常に変化の過程にあり多様な姿を見せる存在であること、保育においては多様な読みとりをする視点と姿勢が重要であることを保育者が共有体験するものとして機能していたと考えられる。第二に、保育実践における「記録物」の創造と配置が、それをめぐる人々の関係やコミュニケーションの変化とどのように関連しているのかを分析した。そこでは、「記録物」という新しい道具の導入によって〈子ども〉〈保育者〉〈保護者〉間のコミュニケーションとネットワークが変容する様子が見られた。また、「記録物」には実践に対する保育者の多層的な時間的視点が重なって機能していることが示された。本研究では、「記録」は実践内容を言葉に乗せて伝える容れ物ではなく、「記録」自体が実践であること、「記録システム」の変革は実践の変革になり得ることが示唆された。

今後の展望

本研究から、「視野」「時間」「他者との協同」が記録行為における意味生成の資源になっていること、保育者は集団で視点を重ねて多層的に新しい意味づけを行い、結論を確定しないという姿勢自体を共有体験していること、記録物の導入によりそれをめぐる人々の関係やコミュニケーションに変化が生じることが明らかになった。今後は、保育実践のダイナミクスを捉えて理論化するために、より微視的かつ重層的なデータをもちいて、ミーティングやカンファレンスや雑談における保育者の談話、記録媒体として残された談話の構造、保育活動中に使用される談話を詳細に分析していくことが課題となる。